

## 夏目漱石『心』研究

——救いとしての「死」——

前 田 友 美

### 一

Kは先生と同じく、故郷の喪失者であると言うことができる。Kは養子に出されたという過去を持ち、先生は二十歳になる以前に両親を喪い、Kは母親を既に喪っている。<sup>(注1)</sup>先生は故郷の叔父に財産を誤魔化されて、裏切られ、故郷をあとにした。一方で、Kは養家から送られる学資を自分の道のために使用し、その結果、実家からも離籍という処置を取られている。Kは自分の居るべき場所を、実家と養家で合わせて二度失うという結果になったということが出来る。Kの第三の居場所とも言い換えることができる、先生に連れて来られた下宿先においても、Kは自殺という形で、自分の居場所から永遠に去るのである。

先生には「私はKと一所に住んで、一所に向上の路を辿つて行きたい」「下 二十二」という気持ちを抱いて下宿

先へとKを連れてきた責任があつた。<sup>(注2)</sup>次の文章からも先生の強い気持ちが窺える。

私が孤独の感に堪へなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落とすのは猶厭でした。(下 二十四)

先生がこのように思っていたのにも関わらず、Kを「より孤独な境遇」(同)にしたのは先生自身であつた。言うまでもなく、Kの死は『心』全体に暗い影を投げかけている。Kが最初に死を意識したのは何時であつたのか。それは先生と房州を旅した時のことであつたと考える。

ある時私は突然彼の襟頸を後からぐいと攫みました。

斯うして海の中へ突き落したら何うすると云つてKに聞きました。後向の儘、丁度好い、遣つて呉れと答へました。私はすぐ首筋を抑へた手を放しました。(下二十八)

「私は自分より落付いてゐるKを見て、羨ましがりました」「同」とあることから、先生には、Kが御嬢さんへの恋心を萌し、死を意識する程までに悩んでいたことがわからなかつたのである。<sup>(注3)</sup>

「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」(下 四十八)というのがKの遺書の内容である。その中で先生がもっとも痛切に感じたのは次の文句である。それは最後に墨の餘りで書き添えたらしく見える、「もっと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらう」(同)という言葉だった。ほんのおまけのように「墨の餘り」(同)で書き添えられたその言葉にKの本心が垣間見える。本当は書かなくてもよいことだと自分でも分かっていたのに、書かずにはいられなかつた言葉なのだろう。

次に、Kが先生から「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」(下 四十二)という言葉を受けた夜の場面を挙げる。

私は程なく穏やかな眠りに落ちました。然し突然私の名を呼ぶ聲で眼を覚めました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其處にKの黒い影が立つてゐます。

(中略) 其時Kはもう寝たのかと聞きました。Kは何時でも遅く迄起きてゐる男でした。私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、たゞもう寝たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所へ行つた序に聞いて見た丈だと答へました。Kは洋燈の灯を背中に受けてゐるので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の聲は不断よりも却て落ちついてゐた位でした。Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。

(下 四十二)

この場面における「襖」については、越智治雄氏によつて「それまで単に日常的な意味しか担つていなかったこの仕切りはほとんど象徴の域に近づいてくる。一枚の襖は先生とKとを隔てる厚い壁なのだ」と既に指摘されている。Kはこの時、どのような心情でいたのだろうか。相原和邦氏はこの場面において次のように述べられている。

お嬢さんとの恋の問題を離れた、もつと高次な問題について語り合いたかったことが推察される。(中略)先生の裏切り行為を知ったにも拘わらず、Kが自殺する晩も、全く同じように仕切の襖を開けているとすれば、Kはこの前の晩から引き続いた問題、恋の得失や友人の裏切り等を超えた人間存在の根本的な矛盾と生の孤独と寂寞をこそ語りたかったのではあるまいか。<sup>(注5)</sup>

Kは「先生」と語り合いたかったのだろうか。越智氏が指摘された「襖の仕切」とともに「火鉢」もその例に挙げられるのではないだろうか。漱石作品における「火鉢」については既に平岡敏夫氏の指摘がある。<sup>(注6)</sup>

- ①私は書物を読むのも散歩に出るのも厭だつたので、たゞ漠然と火鉢の縁に肘を載せて凝と顎を支へたなり考へてゐました。(下 三十五)
- ②するとKの方からつか／＼と私の座敷に入つて來て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ両肘火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押し遣るやうにしました。(下 三十五)
- ③私はKが室へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机

の傍に坐り込みました。さうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑さうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いてゐたでせう、私の聲にはたしかに得意の響があつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室へ帰りました。(下 四十三)

一般的に、襖の仕切を開けて互いが互いの部屋に入り、一緒に「火鉢」の前に手を翳すという行為は、腹を割って話せる親しい間柄にあるからこそ、自然に出来る行為であると思われる。②はKがお嬢さんへの恋を打ち明ける場面である。それはKが先生を信頼したために自分の気持ちを打ち明けることができたのであろう。しかし、③の場面では、互いに火鉢の前に手を翳しながら、先生とKはお互いの心中をまるで察していない。Kは「迷惑さう」にしているだけで、何も言おうとはしていない。かつて先生に御嬢さんへの気持ちを打ち明けた火鉢の前では、もう先生と話すことは出来ないのである。越智氏が示されたように、「仕切の襖」という物自体が、先生とKの間の心の境界線ともいえる働きをしている。その一方で「火鉢」は、表向きには二人が一緒に手を翳すという行為と真逆の心

中を表すものとして描かれていると考えられる。つまり外面的には、先生とKが同じ空間の中に居り、間近くで話しているながらも、内面で生じてしまう、その心の決定的な擦れ違いを表す手段として用いられているのではないだろうか。②と同じ場面で、先生とKは互いの様子が見えていないことがわかる。

恐らく其苦しさは、大きな廣告のやうに、私の顔の上  
に判然りした字で貼り付けられてあつたらうと私は  
思ふのです。いくらKでも其處に氣の付かない筈はな  
いのですが、彼は又彼で、自分の事に一切を集中して  
ゐるから、私の表情などに注意する暇がなかつたので  
せう。(下 三十六)

自分の告白に必死になっているKには先生の表情が分  
からず、一方で先生は「半分何うしやう」といふ念に絶  
えず掻き乱されてゐましたから、細かい点になると殆ど耳  
へ入らないと同様「同」なのである。この描写から、友  
人の心に無関心な、愛情についてのエゴイズムが先生とK  
の双方ともに見られるのである。

Kの死は、自己の中に利己心を見つけてしまったために

起こつたものであると考えられる。「求道」という自らの  
「精進の道」を、全てを犠牲にして貫き通すことを信念と  
していたのに、恋愛の情に囚われて、「精神的な向上心」「下  
三十」を表す「智」よりも「人間らしい」「下 三十一」  
「情」の方に心を傾けた時、自身の中にはつきりとした矛  
盾を感じ取つたのであろう。先生が御嬢さんに結婚を申し  
込んだと知つた時、Kは先生の気持ちに氣がつかかなか  
つたことに最も驚愕したのではなかつただろうか。重松泰雄  
氏は次のように指摘されている。

先生はかつて「私」に、「自由と独立と己れとに充ち  
た現代」に生まれたわれわれは、その犠牲として「淋  
しみ」を味わわねばならぬだろうと語つたことがある  
（「先生と私」十四）。このことばを借りて言えば、K  
が先生を思いやる余裕がなかつたのは、何よりもKが  
「己れ」に「充ち」ていたからにほかなるまい。その点、  
先生の卑劣な行動と根は同じだとも言えるので、程  
度の差こそあれ、Kの側にも（罪）はけつしてなかつ  
たわけではないのである。

Kの所決の理由について重松氏は次のように続けてお

られる。

「世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間すら、自分を理解して」くれず、「世の中にたつた一人住んでゐるやうな氣」(「先生と遺書」五十三)に陥つたとき、彼が、「思ひがけぬ心」ならぬ、「吾意志の欲する所に從」うことのできる唯一の手段―「所決」によつて、かつての「尊とい過去」、むしろ尊かつた過去への回帰を果たそうと考えたとしても不審はあるまい。(傍点重松氏<sup>(註)</sup>)

Kが先生と御嬢さんとの結婚を知つた時に生じた感情は、憤りでもなく、ただ途方も無く大きな淋しみだつた。Kもまた「淋しかつた」のであらう。他者の心が、自分に全て分らないように、自分の心もまた他者には伝わることはない、ということに唐突に気づかされたのではないだらうか。Kの自殺は、他者との関係において、自分のことだけしか考えることが出来ないという、ある意味で、人間の、人間たるところの表出に深く感じ入り、絶望したためであると考ええる。自分に最も近いとも言える存在でさえも、心を互いに全て理解し合うことは難しく、擦れ違いや

誤解による悲劇までも生みかねないという危険性をKの死は訴えている。

先生がKの自殺を知る場面は次のような描写がなされている。

私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失ひました。私は棒立に立竦みました。それが疾風の如く私を通過したあとで、私は又ああ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たはる全生涯を物凄く照しました。さうして私はがた／＼顫へ出したのです。(下 四十八)

先生の眼が「恰も硝子で作つた義眼」(同)となるということは、視覚を失ひ、眼の機能を果たさなくなることとを表している。『心』の中では、「眼」を使った熟語が意図的に用いられている。その例を挙げていきたいと思う。

①色氣の付いた私は世の中にある美しいもの、代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今迄其存在に少しも氣の付かなかつた異性に対して、盲

目の眼が忽ち開いたのです。(下 七)

② Kと私は細い帯の上で身体を替せました。するとKのすぐ後に一人の若い女が立つてゐるのが見えしました。近眼の私には、今迄それが能く分らなかつたのですが、Kを遣り越した後で、其女の顔を見ると、それが宅の御嬢さんだつたので、私は少からず驚きました。(下 三十三)

③ 悲しい事に私は片眼でした。私はたゞKが御嬢さんに対して進んで行くといふ意味に其言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのが即ち彼の覚悟だらうと一圖に思ひ込んでしまつたのです。(下 四十四)

「盲目」「近眼」「片眼」のいずれも、視界が不自由で、視力の不完全な様子を表している。その最たるものが、「義眼」という表現にあるといえよう。視力は最早完全に失われ、造りものの硝子へと成り果ててしまつていたのである。先生には、自分が関わつた物事や、その時の他の人の気持ちも見えてはいなかつたことが分かる。Kの真意を読み取ることができない様子は次のような場面に見ることができる。

「馬鹿だ」とやがてKが答へました。

「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりと其處へ立ち留つた儘動きません。彼は地面の上を見詰めてゐます。

(中略)

私は彼の眼遣いを参考にしたかつたのですが、彼は最後迄私の顔を見ないので。(下 四十一)

Kの「眼遣い」を先生は見る事ができず、どんな表情をしていたか、Kがどんな心境でいたか、知ることが出来なかつた。もう一つ場面を挙げておく。

然し突然私の名を呼ぶ聲で眼を覚めました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其處にKの黒い影が立つてゐます。

(中略)

私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、たゞもう寐たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所へ行つた序に聞いて見た丈だと答へました。Kは洋燈の灯を脊中に受けて

ゐるので、彼の顔つきや眼つきは、全く私には分りませんでした。(下 四十三)

Kの「眼つき」を、またしても先生は見ることができない。先生はこのKの行動を奇異に感じ、Kの「覚悟」(下四十四)を御嬢さんへの恋に進んでいく覚悟であると、受け取ってしまうのである。<sup>(注10)</sup>Kと先生は、「眼」を使った熟語が表すとおり、擦れ違いの関係であつたということができさるだろう。

## 二

先生は遺書の終わりに、次のように書いている。

私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。  
(下 五十六)

「明治の精神」とは何を表しているのか。<sup>(注11)</sup>伊豆利彦氏は「こゝろ」における「明治の精神」とは「求道」の精神

であり、そのために一切を犠牲にして精進する精神であつた。<sup>(注12)</sup>とされている。しかし先生の言う「明治の精神」は果してそのような意味のものであつたのだろうか。「明治の精神」は先生独自の、言わば個人的なものとして、己に還元したものであるといえるだろう。例えば乃木大将やKといった他の人物と、自分の人生を重ねながら、先生は死んでいったといえるのだろうか。自分の過去を見つめながら、現実の日々が過ぎていくなかで、先生は自分が生きてきた明治という時代の終焉を迎えた。『心』では時代というものが強く意識されている。先生の背後には何時でも己を掴んで離さぬKとの過去があり、「私」は先生よりも少し未来の世代を生きていく青年である。先生には、共に生きていくはずだった静との「今」を正面から見つめて暮らしていくことはできなかった。静を愛し、愛されている実感を得ながら、先生は自分の本心を静に伝えることはしない。先生は自分がどんなに苦しんでいたかを、「私」に伝えようとするのではない。

先生はどのような死に方をしたのだろうか。遺書においては次のように書いている。

私は妻に残酷な驚怖を與へる事を好みません。私は妻

に血の色を見せないで死ぬ積です。妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思はれたのです。気が狂つたと思はれても満足なのです。(下 五十六)

先生がこのように考えていることについて、「ある仕官」(上 二十四)の死に方に関して「仕官のような死に方ならば、まさにうってつけのものであり、これを記述するときの漱石に先生の死に方が連想されていたのではないか。」と論じられたのは平岡敏夫氏である。先生は、自分が自殺によつてこの世から去ることを静に知られたくないのである。かつてKの自殺を目の当たりにした先生であるからこそ、置き去りにされる者の喪失感を静に味わわせたくないのである。静に血の色を見せないで死ぬ積りであるということは、Kの自殺の際、「襖に迸ばしつてゐる血潮」(下四十八)を見た先生であるからこそ、同じような精神的な傷を静には負わせたくないと考えたためであらう。しかし一方で、「血潮」については、先生と「私」の間においても関係の深いものである。「私」は先生に対してこのように感じている。

私は東京の事を考へた。さうして漲る心臓の血潮の奥に、活動々と打ちつゞける鼓動を聞いた。不思議にも其鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められてゐるやうに感じた。(中略)肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。(上 二十三)

一方で先生は遺書のはじめで次のように書いている。

私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです。私の心臓を立割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです。(中略)私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。(下 二)

Kの「襖に迸ばしつてゐる血潮」(下四十八)に「暗示された運命の恐ろしさを深く感じた」(下 四十九)先生



が、同じ「血潮」によって、「私」が「新しい命」を得るということ述べていることは、Kに対するものと、「私」に対するものとの大きな差異が窺える。「血潮」そのものが命のメッセージを象徴しているなら、静に対してはどうであつたろうか。静には自分の「血の色」を見せない積りである、と先生が記したのは、やはり静に、自分の本心を愛して伝えることはできないと判断したためであろう。静を愛していたからこそ、かつてKの血潮を見て、受けた衝撃を繰り返させることが忍びなかつたという理論でいくと、ここに破綻が生じるのである。先生が静を愛していたということを否定するつもりはないが、先生は、静にだけでなく、自分の血の色を他の誰にも見せるつもりはないのである。「血潮」とは、Kの実際の血潮から、先生と「私」を繋ぐ精神的なものへと変化して、最終的には先生の心の内へと帰っていくものを表していると考えられる。Kの「血潮」は実際の現象として、先生の記憶をさいなむ、恐ろしいものであり、完全に息絶えた無機質なものであるという印象を与える。それを「私」との関係においては「温かい」「下二」という表現が為されていることに注目したい。<sup>(註16)</sup>

先生の死の理由について、伊豆利彦氏は次のように言われている。

『こゝろ』の先生は単にKに対する罪をあがなうために死んだのではなかつた。虚偽の生活を清算し、自ら死ぬことによってまことの生を得るために、さらに新しい生命を得て復活するために死んだのである。(中略) 奥さんは先生の内部にはすこしも生きていない。そして先生の内部に生き続けているのはKの黒い影である。Kは死ぬことによって先生の内部に生き続けたのであり、先生の運命を支配したのである。<sup>(註16)</sup>

伊豆氏はKの存在が先生を死へと向かわせたという解釈をされているが、果たしてKは先生の運命を支配するほどの力を持ち得たのだろうか。先生にとってKは強大な力をもった人物のように描かれているが、Kの本質はもつと人間らしいものであり、自分の「弱さ」と、打ち碎かれるような淋しさを受け止め切れなかつた。Kは御嬢さんへの恋を止めることが出来ず、「精神的な向上心」を持ち得ないことに対するひたすらの自責の念と、自分がこの世にたった独りであることを再認識しながら死んでいったのである。<sup>(註16)</sup>

先生の周りには死がつきまとう。先生は誰よりも、家族

を欲していた人物であつた。それは成人しないうちに両親を亡くしたこともきつかけと言えるだろうが、先生が用意したという「華奢な食卓」「下 二十六」もまた先生の、家族を持ちたい、という気持ちを表す道具であるといえるのではないだろうか。<sup>(注17)</sup>先生は、奥さんや御嬢さんやKと暮らしていたころ、一度失つた家族を取り戻したいという気持ちでいたのではないだろうか。しかし先生はまだ、自分が家長となつて、家庭を作っていくことを、まだ遠い眼で漠然と見つめていたにすぎなかつたのである。

Kが遺書の中で記した「もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらう」「下 四十八」という気持ちはKも先生も同じであらうと思われる。先生の死について猪野謙二氏は次のように言われている。

かれはKの不自由な精神主義・人格主義を「人間らしくない」とし、これを「人間らしい」ものに変えてやろうと努力した。また他人を愛そうとし、己れの恋愛を美しく結実させようとした。しかも意外にも、そのような他人への働きかけが、「現代」においては、もはや全く無意味なものでしかないということ、そこには個々ばらばらに孤立化された、自己をも含むひとそ

れぞれの醜惡な―とかれには思われる―エゴイズムを見出すことしかできないということ、かような内実が、Kの死を機として、突然、天来の啓示のようにかれの心にせまってきたとき、かれにとつて信ずることのできるものは、もはや自分をも信じ得ないという、かれ自身の意識、そのものの以外にはなくなつた。<sup>(傍点原文)</sup>

猪野氏は、先生にとつて、自分が、Kへの働きかけたことが、全く無意味なものでしかなかつたと、言われているが、そのように断じることが可能なのだろうか。先生がKを自分の下宿へと誘つたのは、ただ、Kと同じ道を辿つていきたかつたからである。それは人間らしい感情と呼べるものであらう。それを全て無意味とするなら、人と人の関係は全て無意味なものになつてしまふのではないだろうか。人の関係性が無為であるということのみを、『心』は訴えるものだろうか。

『心』の中で死は繰り返し描かれており、それを目撃する人物たちを見ていると、『運命』という言葉が浮かんでくる。Kの死体を目前にした時の先生の気持ちは次のように語られている。

私は忽然と冷たくなつた此友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。(下 四十九)

水谷昭夫氏はこの箇所について、次のように言われている。

漱石は運命だと書いた。作品『それから』や『門』以来、くりかえしあらわれる漱石文芸のドラマを決定する、きわめて重要なことである。(中略) 元来自らは責任をとり得ないようなものの、そのものとか、わりを、なおも自らのものとしてうけとめて行く事を余儀なくされる。その生存の深淵に対する漱石の関心(注19)なのである。

水谷氏が指摘されたように、『心』において漱石は、人が自らの責任を越えたもののために、命で贖ってゆくこととする生存の深淵を覗き込み、描こうとしたのではないだろうか。先生は、親友の死を自分の生において思い起こし、反芻し、これからも生きていく積もりであった。先生は、自分がこの世にいつでもたった独りだったということを、

Kの死を境に強く意識するようになった。それ以前から、先生は、叔父に財産を誤魔化された出来事によつて、人間を信じられなくなっていた。先生が最後に漸く気がついたのは、自分の過去に捕らわれて自分のためだけに死ぬのではなく、誰か他の命のために自分の命を生かす方法だった。

Kは自分一人でも「道」を進んでいくことを決心していた。「道」のため、つまり精神的な修養の意を表す「智」のために、養家を欺くほどのKであるから、そこに「情」は不要だったのである。しかし、自分が本当に独りになるということをお願い知らされたのは「情」によるもの、恋愛の「情」によつてであった。Kは己れの「智」を信じ、自身に生じた「情」を受け止めきれず、死んでいった人物である。それに対し先生は、よくKに対して「人間らしい」(上 三十一)という言葉を使っていた。先生は「人間の為」(下 五十四)の「情」を持ちながら死んだ人物であるといえよう。遺書を書き、たった一人でも、自分の考え全てを伝えることの出来る人物に出会えたことが、Kとの違いの一つともいえるだろう。

### 三

最後に、先生と「私」のある会話を挙げる。

「君、私は君の眼に何う映りますか。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中位に見えます」

此答は先生に取つて少し案外らしかつた。先生は又口を閉じて、無言で歩き出した。(上 十)

先生は、自分を弱い人間であると自覺しており、「私」からもそのように言われることを予測していたのだろう。しかし先生の予想に反して「私」の答えは「中位」だったのである。おそらく先生の前で恐縮していた「私」は差しさわりのない答えを出したに過ぎないだろう。では「私」の答えは間違っていたのだろうか。「私」はその後、別の場面で、先生の、「私は是で大變執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」(上 三十)という言葉を聞く場面で、「私は先生をもつと弱い人と信じてゐた。そうして其弱くて高い處に私の懐かしの根を置いてゐた」(同)と記しているので、先生の興奮した様子を目の当たりにして「弱くて高い」という印象を少し變化させていることがわかる。また先生は次のようにも言っている。

然し私はまだ復讐をしずゐる。考へると私は個人に對する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む許りぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覺えたのだ。私はそれで澤山だと思ふ。(同)

人間を憎むということを覺えたと先生は言っているが、遺書の中では、靜の母を懇切に看護したことについて、次のように語っている。

是は病人自身の為でもありますし、又愛する妻の為でもあります。もつと大きな意味からいふと、ついに人間の為でした。私はそれ迄にも何かしたくつて堪らなかつたのだけれども、何もする事が出来ないの己を得ず懷手をしてゐたに違ありません。(下 五十四)

この矛盾は先生の心のうちを如実に表すものであるといえよう。人間を憎み、人間を愛さずにはいられない、まことに人間らしい矛盾が滲み出ている。どちらもまた先生

にとつては真実なのである。<sup>(注20)</sup> 先生は、強くもなく、弱く

もなく、やはり、「中位」の人間であつたのだらう。だからこそ先生の生と死が、読み手の心の奥まで響き、その生の意味を静かに問いかけるのではないだらうか。

遺書の終わりに感じられる奇妙なすがすがしさは、死への覚悟が定まり、安心して死んでゆくことができる先生の至った最期の境地であると考えられる。

注

(注1) ①私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにゐて呉れたなら、少くとも父か母か何方か、片方で好いから生きてゐて呉れたなら、私はあの鷹揚な気分を今迄持ち続ける事が出来たらうにと思います。(下 三)

②もし彼の実の母が生きてゐたなら、或は彼と実家との關係に、斯うまで隔りが出来ずに済んだかも知れないと私は思ふのです。(下 二十一)

①、②で挙げた「もししうだったなら」という仮定条件の中での非現実仮定の言い方によつて、偶然のように見えた過去が、二人に共通する必然のものとして意味を為し、人の力でどうすることもできない運命のように、現実が二人に重く覆い被さっていることが窺える。

(注2) 先生がKを下宿先に連れてくる以前に、次のような先生の述懐が書かれている。

一 圖な彼は、たとひ私がいくら反対しやうとも、矢張自

分の思ひ通りを貫いたに違ひなからうとは察せられます。然し万一の場合、賛成の声援を與へた私に、多少の責任が出来てくる位の事は、子供ながら私はよく承知してゐた積です。よし其時にそれ丈の覚悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起つた場合には、私に割富られただけの責任は、私の方で帯びるのが至当になる位な語氣で私は賛成したのです。(下 十九)

この場面で既に先生はKが養家を欺き、自分の道を貫くことについて、自分の責任を自覺している。

(注3) 「不思議にも彼は私の御嬢さんを愛してゐる素振に全く気が付いてゐないやうに見えました」(下 二十八)

この文章から、Kが先生の御嬢さんへの気持ちに気が付かないのと同時に、先生もKが御嬢さんを愛していたことが気がつかなくなつたという逆の見方も可能である。

(注4) 越智治雄「こゝろ」(越智治雄著『漱石私論』 角川書店昭和46・6 282頁)

(注5) 相原和邦「補説一「こゝろ」の人物像」(相原和邦著『漱石文学の研究——表現を軸として——』 明治書院昭和63・2 447頁)

(注6) 平岡敏夫氏は「密室における「一つ火鉢に両側から手を翳す」イメージへのこだわり、このイメージの持つ親和力と緊張度、暗さ、美しさ、総じてその魅力といったものが、「門」からさらに「行人」に至って、充分に發揮されている」と指摘されている。

「火鉢の両側に手を翳す——漱石作品の一イメージ・「門」

「行人」より——」群馬県立女子大学国文学研究 第16号

群馬県立女子大学国語国文学会 平成8・3 16頁

(注7)『草枕』の冒頭の文を次に引用する。

山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。  
情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人  
の世は住みにくい。

「智」と「情」はそれぞれ「頭」と「胸」に言い換えること  
ができる。

(注8)重松泰雄「「こゝろ」を読む・Kの意味——その変貌を  
めぐって——」(重松泰雄著『漱石その歷程』おうふう 平  
成6・3 328頁)

(注9)(注8)に同じ335頁

(注10)先生がKに対して使った「覚悟」(下 四十二)が御嬢さ  
んへの恋を止める意だったことに對し、Kが使った「覚悟」(同)  
を、先生が恋に進む覚悟ととったことが修復不可能な擦れ違  
いを生んでいる。この場面でKが発した「覚悟」は、自分の  
死に対する決意であった。

(注11)「明治の精神」についての研究者のいくつかの意見を次に  
挙げておく。

水谷昭夫氏は次のように言われている。

この「明治の精神」はあまりにも作品の本質に深く参  
与しすぎている。鵬外にとってもそうであった様に、わ  
が国の「明治」を代表するこの二人の作家にとって、明

治天皇の死とそれに殉じた乃木將軍の行為のもつ意味が、  
その近代的なものの位置付けにおいて、正しく評価され  
るべきものであろう様に思う。

「心」の世界」(水谷昭夫著『漱石文芸の世界』桜楓社  
昭和49・2 179頁)

桶谷秀昭氏は次のように言われている。

「自由と独立と己れに充ちた現代」が、先生が殉死した  
あの「明治の精神」の総体を意味するものではない。そ  
れは「明治の精神」の一面であり、他の一面は、「自由と  
独立と己れ」のいわば「自己本位」の精神の犠牲となり、  
寂寞に襲われざるをえない淋しい「明治の精神」である。

「淋しい「明治の精神」——『こゝろ』(桶谷秀昭著『夏  
目漱石論』河出書房新社 昭和51・6 185頁)

佐藤泰正氏は次のように言われている。

おそらく「明治の精神」とは、ついに実体をもつて呼  
びうるなものでもあるまい。ただ彼がそこに歩み来った  
た「深い背景」と「根底」のいつさいを、死を賭けて誠  
実に語りつくすという行為そのものが、「明治の精神」  
の何たるかをわずかにあかしうるものではなかったのか。

(傍点原文)「『こゝろ』——《命根》を求めて——」(佐  
藤泰正著『夏目漱石論』筑摩書房 昭和61・11 313頁)

平岡敏夫氏は次のように言われている。

「屈辱と損害」の執念があればこそ先生の内面に「苦し  
い戦争があった」のであり、その解決は死の道しかなかっ

た。天皇崩御による「明治の精神」の自覚はそこに訪れる。自責と外（他）責の葛藤を、自責による死の方向だけでは、外（他）責あるゆえに解決できなかった先生は、ここに他責の方向による死、すなわち「明治の精神」への殉死という道を発見したのである。「屈辱と損害」の執念は「明治の精神」に救いとられたのである。ここに先生の葛藤のやむとき、すなわち自責と他責を満たす自殺が可能となった。

「こゝろ」——「明治の精神」を中心に——（平岡敏夫著『漱石研究』有精堂 昭和62・9 344頁）

相原和邦氏は次のように言われている。

前近代を引き継いだ「明治の精神」と大正以後に通う「自由と独立と己とに充ちた現代」はともに、K・先生・「私」の特殊な個性を媒介としつつ、それをこえた時代精神の顕現にもなり得ている点が留意されよう。ただ、それには、天皇への敬慕から個人への忠誠心の発露として死を選んだ乃木とは似て非なる面があることを確認しておくなくてはならない。乃木や「私」の父は、天皇を頂点としたヒエラルキーへの帰順であり、死もまたある種の有効性を發揮し得るいわば有用の明治への帰属であった。しかし、先生は、自己の死が全く孤立の中の無効の死であることを知りつつ、なお、自分の「運命」は自滅以外にないことを知り抜いている。

「一つの終局——「こゝろ」（相原和邦著『漱石文学の研究

——表現を軸として——』明治書院 平元・2 335～336頁）  
自分の責任の及ばないもののためにこそ、責任を取ろうとする意識のことを「明治の精神」と呼ぶのではないだろうか。

（注12）伊豆利彦「夏目漱石と「明治の精神」」（伊豆利彦著『漱石と天皇制』有精堂 平成2・9 308頁）

（注13）「自分で病気に罹つてゐながら、気が付かないで平気であるのがあの病の特色です。私の知つたある仕官は、とう／＼それで遣られたが、全く嘘のやうな死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝てゐた細君が看病する暇もなんにもない位なんですからね。夜中に一寸苦しいと云つて、細君を起したがり、翌る朝はもう死んでゐたんです。しかも細君は夫が寝てゐるとばかり思つてたんだつて云ふんだから」（上 二二四）

（注10）に挙げた平岡敏夫氏の同論文の344頁において既に指摘されているが、この「ある仕官」だけに限らず、明治天皇をはじめ、御嬢さんの母である奥さんが腎臓病で亡くなり、「私」の父も同じ病で危篤に陥ることも確認しておきたい。

（注14）三浦泰生氏は先生と「私」の繋がりに注目し、次のように指摘されている。

漱石は、これ迄のように自分が直接に主人公について語るのではなく、第三者を通じて語らしめることによって、反つて問題を一層深く、しかも客観的に追求し形象し得るという、創作上の秘密に気づいたのではなかったか。（中略）「心」の先生は遂に自殺しなければならなかった。し

かし先生の体験は、私を通じることによって未来に生き得た。

「漱石の「心」における一つの問題」(『日本文学』13巻5号 日本文学協会 昭和39・5 351頁)

(注15) (注13) に同じ344～345頁

(注16) 第三章第一節で既に述べているが、Kは先生と房絵を旅行した時に、既に死を意識しているのであり、先生がいくらKを出し抜いて御嬢さんに結婚を申し込んだということを悔いていても、やはりKの死の原因はK自身にあるものだと考える。

(注17) 石崎等「ちやぶ台のメタファー」(石崎等著『漱石の方法』有精堂 平成2・7 283頁)

石崎氏は次のように言われている。

先生が床と棚のある書院構えの八畳で膳の食事を摂っていたとき、それは下宿人Ⅱ客としての身分にすぎなかった。それが、六畳の茶の間でちやぶ台を囲んで〈奥さん〉〈お嬢さん〉と一緒に食事をするようになったとき、そこには明らかに「客扱ひ」を超えた疑似家族関係が生じたのである。さらにそこにKが加わることは、悲劇を胚胎させることを意味した。先生が〈奥さん〉の家になじみ、まがりなりにも家族の核とならざるを得ないとき、Kは不可避免的に排除されねばならない存在となる。〈お嬢さん〉をめぐる先生とKとの心理的な角逐が顕著になったとき、一同に集まる食事時間には、小さなちやぶ台の上でさま

ざまな思いの眼差が交錯する。

石崎氏が言われる通りに、ちやぶ台の上では一斉に集う場として、先生、奥さん、御嬢さん、Kの様々な思いが交錯していると考えられる。しかし先生は、下宿生活をより円滑にしようとして、「わざわざ御茶の水の家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上させた」「下二十六」のであって、結果的に家族のような形態のようになったということが考えられる。それは先生が無意識のうちに家族という形態を強く希求していたためではないだろうか。

(注18) 猪野謙二「『心』における自我の問題」(猪野謙二著『明治の作家』岩波書店 昭和41・11 134頁)

(注19) 水谷昭夫「『心』の世界」(水谷昭夫著『漱石文芸の世界』桜楓社 昭和49・2 176頁)

(注20) 先生の心の矛盾を表す描写は次の場面にも見られる。

貴方は定めて変に思ふでせう。其私が其処の御嬢さんを何うして好く余裕を有てゐるか。其御嬢さんの下手な活花を、何うして嬉しがつて眺める余裕があるか。同じく下手な其人の琴を何うして喜んで聞く余裕があるか。さう質問された時、私はたゞ両方共事実であつたのだから、事実として貴方に教えて上げるといふよりは外に仕方がないのです。(下 十二)

私の煩悶は、奥さんと同じやうにお嬢さんも策略家ではなからうかといふ疑問に会つて始めて起るのです。

(中略)



それでゐて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑はなかつたのです。だから私は信念と迷ひの途中に立つて少しも動く事が出来なくなつて仕舞ひました。私には何方も想像であり、又何方も眞実であつたのです。(下 十五)

例に挙げたように、二つの異なつた心情が混在し、また双方ともが眞実であると先生が認めて遺書に書いていることが、『心』が、揺れ動く矛盾を抱えた人の心の眞実を捉えた作品であるということの証明ではないだろうか。